

『沖縄芸術の科学』第32号別刷

「冊封琉球国記略」に記された組踊
「銘苺子」に関する考察
—「演戯故事」との内容比較を中心に—

我部大和

2020年3月

「冊封琉球国記略」に記された組踊「銘苺子」に関する考察

— 「演戯故事」との内容比較を中心に —

我部大和

A Study of the Kumiodori “Mekarushi” as recorded in “Ce feng liu qiu guo ji lue.”

: Focusing on a comparison with “Engikoji”

Hirochika GABU

In this paper, I consider the description of the Kumiodori play “Mekarushi,” included in the text “Ce feng liu qiu guo ji lue” (冊封琉球国記略), which is part of the manuscript “Ji shi zhu” (記事珠) by Qing dynasty calligrapher Qian Yong. Comparing Qian’s description to the Chinese-language description of the play in “Engikoji,” a text in the collection of the Naha City Museum of History, I find that Qian likely referred to the “Engikoji” in writing the “Ce feng liu qiu guo ji lue,” while also including detailed descriptions of the stage not included in the “Engikoji.” I thus show the importance of these two texts for our understanding of the history of Ryukyuan performing arts.

はじめに

組踊は1719（康熙58）年の尚敬王冊封の際、踊奉行に任命された玉城朝薫が創作し、台詞、歌曲、舞踊を組み合わせ、一組にまとめた形式の歌舞劇である。その後、組踊は中国から訪れた国王即位儀礼を取り仕切る冊封使歓待の宴で数多く演じられた。

そこで、首里王府は冠船芸能を上演する際、冊封使に組踊の詞章などを理解してもらうため、漢文訳した解説書である演戯故事を作成した。

演戯故事の内容研究について、矢野輝雄は演戯故事に記された組踊の内容に

ついで、儒教倫理観が琉球に及んでいることを来琉している冊封使へ指し示すにあたり、演戯故事が重要な役割を担っていることを指摘している¹。板谷徹は組踊台本と演戯故事との比較を通して、①台本には記載されていない登場人物の名称や年齢が演戯故事からうかがい知れる②作品の時代設定が演戯故事に明記されている③台本に見られぬ演出の記述的特徴があるとしている²。拙稿では演戯故事に記された組踊の作品に関して演戯故事と組踊台本との内容比較した研究を行い、儒教的な内容の加筆が随所にみられることを周辺史料や中国演劇などから指摘した。それにより王府は冠船芸能を通して、冊封使に対し儒教の教化が行われたことを舞台上の台本と演戯故事の漢文訳の世界を組み合わせつつ表現したと指摘した³。

本稿では、那覇市歴史博物館蔵の尚家文書中にある「演戯故事」と清代の書家であった銭泳がのこした『記事珠』の中から沈復が著したとされる「冊封琉球国記略」中に記載がみられる組踊「銘苺子」の内容について、「演戯故事」との記述内容の比較を行い、琉球側で記された組踊の内容が中国側にとってどのように書かれたのかを検討していきたい。

1. 「冊封琉球国記略」について

「冊封琉球国記略」は、清代の書家銭泳の手稿である『記事珠』の中に収録されたもので、1808（嘉慶13）に琉球国王の冊封正使斉鯤、副使費錫章と共に琉球へ行き、その時の北京から琉球へ向かう様子、琉球滞在中に行われた儀礼などを日記体で記された随筆である。『記事珠』の内容について蔡根祥は、『記事珠』の原稿は大量にある中で、沈復の人生や著作が叙述されていることや琉球の歴史、風土、民俗などの記述があり、沈復の『浮生六記』に記された内容を書写したのではないかと指摘している⁴。

沈復が著した『浮生六記』は1877（光緒三）年、楊引伝によって発見された⁵。発見当時、『浮生六記』の全6巻のうち4巻が残存しており、残り2巻（巻五「中山記歴」、巻六「養生記道」）は見つからず欠巻であった。その後、巻五「中山記歴」と巻六「養生記道」が発見され『足本浮生六記』として出版したが、楊仲揆・呉幅員らにより巻五の「中山記歴」は偽作という説が提唱され、現在では偽作が定説化している⁶。そのため、『浮生六記』は現在も2巻

の原本がいまだに見つかっていない。しかし、銭泳の『記事珠』が発見され、沈復が琉球へ行ったことが記されていることなどから史料の位置づけとして『浮生六記』の初稿本ではないかと推測されている。

そのため、これまでの「冊封琉球国記略」研究は管見の限り僅少であり、まだ、沈復『浮生六記』の原稿か否かの真贋の議論に終止している。

したがって、冠船芸能の組踊に関する研究にとって、中国側における組踊にかかる漢文史料としてきわめて貴重な史料であると考えられる。また、冊封使以外の人々がどのように組踊を記しているかを検討する上で、今後こうした史料を用いて検討すべきであろう。

次節では、同じ漢文史料である「演戯故事」との内容の異同を比較しながら、関連史料などとも参考にしつつ検討していきたい。

2. 組踊「銘苺子」の記述内容の比較 — 「演戯故事」と「冊封琉球国記略」との記述比較 —

次に、「演戯故事」「冊封琉球国記略」に記された組踊「銘苺子」の検討に入りたい。まず「冊封琉球国記略」に記された「銘苺子」の内容を紹介したい。その内容は以下の通りである⁷。(引用部分に関して、出典に記されている簡体字を常用字に変えた。【 】は筆者による現代語訳。以下同じ。)

伝奇一段，名曰《天縁奇遇兒女承慶》。先有一生，青衣皂帽扮一樵人，名曰銘苺子。繼有一旦，甚美，頭梳高髻，後髮披肩，外披白綢五彩印花曳長袄，内衬銀紅衫子，肩上蟠大紅風帶一條，扮一天女，從松樹上下台心，即將風帶解下，掛于樹上，似作沐浴之狀。銘苺子窃帶藏之，天女失帶，惶惧不能飛昇，與銘苺子問答良久，遂為夫婦。生一女名真鶴、年九歲，又一男名思龜，年五歲，皆七八歲小童扮之，唇紅齒白，妝束逼肖。是時騙兒女眠于榻上，忽然尋出風帶，徐徐登松樹上，將昇天矣。下顧兒女作悲泣狀，兒女惊醒，追呼樹下，天女已至松頂，忽有白雲從上而下以迷去路，其雲皆綿花結成。銘苺子亦追尋至樹下，与兒女对松樹大哭。忽出一大夫問銘苺子，回奏知国王，召其父子賜爵祿，并取其女入宮扶養。此其開国時之故事，其場後之松樹專為此而設也。此樹甚高，已百年物矣。

【伝奇の一段で名を『天縁奇遇児女承慶（銘苺子）』というのがある。まず、男役は青色の衣と帽子をかぶり、木こりに扮している。名を銘苺子という。つぎに、女性役はとても美しく頭の髻が高く、後ろの髪にある披肩の外は、白綱に様々な色がほどこされており長く引きずっている。中は、朱色の袖広の上着を来ている。肩の上には赤色の帯がとぐろを巻くように風に舞っており、天女に扮している。（天女は）松の木の上から下へ向かい、風帯（羽衣）を解き、木の上へ掛けて、沐浴をする様子に似ていた。銘苺子は帯をかすめ取り、天女は帯を失って昇天出来ずうろたえてしまった。銘苺子と問答を長らく繰り返し、ついに夫婦となった。（銘苺子と天女の間には）一人の女兒が生まれ、名を真鶴といい、年は九歳。また一人の男児が生まれ、名を思亀といい、年は五歳。皆、七、八歳の子供が扮しており、唇が赤く歯が白くて美しく、現実にいるように見える。この時、（天女は）児女を騙して寝台の上で眠らせた。突然風帯を探し出し、ゆっくりと松の上に登り、昇天しようとしていた。下にいる児女（子ども達）をみて、悲しみ泣いている状況であった。児女は驚いて目が覚め、追いかけて木の下で（母親を）呼んだ。天女はすでに松の頂上にいた。すると突然、上から下まで白雲が現れ、（児女が）道に迷っていた。その雲は全て綿花のようにつながっていた。銘苺子もまた（児女を）追って木の下まで探すと、児女と松で大いに泣いていた。突然、一人の大夫が現れ銘苺子に尋ね、国王が（銘苺子親子の様子を）聞き、父子を呼び寄せて爵位を与え、また女兒を宮廷に入れ育てることにした。これは琉球が開国した時の故事である。その場（舞台）の後に松があり、もっぱらこの為に設置した。この木は甚だ高く、すでに百年物である。】

以上が「冊封琉球国記略」に記された組踊「銘苺子」の内容である。次に、演戯故事との記述内容と比較を行う。

（１）「冊封琉球国記略」「演戯故事」における組踊「銘苺子」の表題

まず、組踊の「銘苺子」の漢訳の題名に関して、「演戯故事」および「冊封琉球国記略」でも「天縁奇遇児女承慶」⁸とある。さらに、「冠船躍方日記」においても「銘苺子」の漢文の表題も同じ表題である。そのため、沈復は「冊

封琉球国記略」を著す際に演戯故事の表題を援用した可能性が高いといえよう。

しかし、演戯故事に関して、琉球側が「躍組」（演戯故事）を用意した上で、清国側に冊封正使・副使、遊撃、都司、弾圧官、河口通事へと呈上されている⁹。しかし、沈復がどのように「演戯故事」を入手したのかを今後、検討すべきであろう。

次に、「冊封琉球国記略」に記されている組踊「銘苺子」の内容と「演戯故事」との内容を比較した上で、沈復がどの内容などに着目していたのかなどを検討する。

（2）「冊封琉球国記略」と「演戯故事」に記された内容比較

次に、「冊封琉球国記略」と「演戯故事」に記された組踊「銘苺子」の内容比較を行う。まず、「冊封琉球国記略」で天女と銘苺子の出会いと夫婦になるまでの様子は下記の通りである¹⁰。

従松樹上下台心，即將風帶解下，掛于樹上，似作沐浴之状。銘苺子窃带藏之，天女失带，惶惧不能飛昇，與銘苺子問答良久，遂為夫婦。

【(天女は)松の木の上から下へ向かい、風帯(羽衣)を解き、木の上へ掛けて、沐浴をする様子に似ていた。銘苺子は帯をかすめ取り、天女は帯を失って昇天出来ずうろたえてしまった。銘苺子と問答を長らく繰り返し、ついに夫婦となった。】

「冊封琉球国記略」では、前述で紹介した銘苺子や天女が松から降り、風帯を解いて木の上に掛けて、沐浴をしているとある。ここでの「風帯」とは「風に吹かれてたなびく帯」¹¹とある。しかし、「冊封琉球国記略」に天女の容貌における「風帯」に関して、銘苺子が風帯(羽衣)を「肩上蟠大紅風帯一条」とあり、肩の上にとぐろを巻くように赤い帯を一つ纏っている様子とある。このため、おそらく「風帯」が「羽衣」のことであろうと考えられる。「冊封琉球国記略」では、銘苺子は帯をかすめ取り、天女が昇天できずにうろたえていた、とあり、「演戯故事」でも、「銘苺子陰取其衣藏之荒草中」¹²とあり、銘苺子が天女の衣を取り蔵の草むらの中へ隠したとあり、「冊封琉球国記略」とほ

は類似している。

一方、天女が昇天できずにうろたえる様子に関しては「演戯故事」に記されて居らず、銘苺子と天女の間答がすぐに行われている。また、「冊封琉球国記略」では銘苺子との間答が長らく繰り返され結婚にいたっているとある。他方、演戯故事では銘苺子と天女との間答と婚姻関係を結ぶ内容が詳述されている¹³。そのため、「冊封琉球国記略」では銘苺子と天女との間での間答および婚姻を結ぶまでの経緯は省略されている。あらずじとして沈復が「銘苺子」の内容をおさえていたことがわかる。

次に、「冊封琉球国記略」では天女が昇天する場面において天女と子ども達の様子が下記の通り記されている。

是時騙兒女眠于榻上，忽然尋出風帶，徐徐登松樹上，將昇天矣。下顧兒女作悲泣狀、兒女惊醒，追呼樹下，天女已至松頂，忽有白雲從上而下以迷去路，其雲皆綿花結成。銘苺子亦追尋至樹下，与兒女对松樹大哭。

【この時、(天女は)兒女を騙して寢台の上で眠らせた。突然風帯を探し出し、ゆっくりと松の上に登り、昇天しようとしていた。下にいる兒女(子ども達)をみて、悲しみ泣いている状況であった。兒女は驚いて目が覚め、追いかけて木の下で(母親を)呼んだ。天女はすでに松の頂上にいたが、突然、上から下へ白雲が現れ見失った。その雲は全て綿花のように形成された。銘苺子もまた(兒女を)追って木の下まで探すと、兒女と松でとても泣いていた。】

「冊封琉球国記略」では「是時騙兒女眠于榻上」とあり、天女が子ども達を騙して寢台の上で眠らせた、とある。「演戯故事」では「不如誑他早睡俟他睡熟暗地飛去」¹⁴とあり、自ら昇天をするためには子ども達を騙し、ひそかに飛び去ろうとする、とある。また、天女が子ども達に嘘をついて子ども達を寝かせようとする内容が詳述されている¹⁵。

天女が子ども達を寝かせる場所に関して「榻上」とある。「榻」とは狭くて低い寢台¹⁶とあり、寢台の上で寝かせたとある。一方、「演戯故事」ではそうした記述はない。また、現在に継承されている組踊の演出でも子ども達を寝か

せる演出はあるが、寝台を置いていない。

次に、「冊封琉球国記略」では「忽然尋出風帯，徐徐登松樹上，将昇天矣。下顧兒女作悲泣状」とある。天女が風帯を探し出し、昇天しようと徐々に松の木の上に登っていきながら、下にいる子ども達をみると悲しく泣く様子が記されている。一方で「演戯故事」でも「天女即起入室奥去身穿飛衣出来」¹⁷とあり天女が奥の部屋から羽衣を着て出てきていることがわかる。また天女が子ども達を見て泣く様子に関しては、「天女見兒女無心而熟睡情氣如湧不能飛去聊撫兒女吞声痛哭復起復倒」¹⁸とあり、天女が子ども達をなででは眠っている様子をみていると情が湧いて飛ぶに飛ばれず、声を殺し、泣いては倒れる様子を記している。

「冊封琉球国記略」では、「兒女惊醒，追呼樹下，天女已至松頂」とある。「演戯故事」でも類似した記述として、「此時兒女忽然驚醒弟思龜以手搜母母既不在急喚」¹⁹とあり、兒女が突然起きて手で母が居るか探ると母が居ないことに気付きわめいた様子が記されている。次に、「演戯故事」では「弟望松梢指曰母親在梢上」²⁰とあり、弟が母親を見つけ枝の上にいるのを見つける様子が記されており、弟が見つけたことを除き「冊封琉球国記略」と類似している内容が記されている。

一方で「演戯故事」に詳述されている内容として天女が涙を流して自らがこの世の人ではないことや昇天後に父親である銘苺子に尽くしてほしい、と言付ける内容がみられる²¹。

他にも、「冊封琉球国記略」では「忽有白雲從上而下以迷去路，其雲皆綿花結成」とあり子ども達が木の下に着くと、突然綿花のような雲が上から下へと現れ母親である天女を見失う様子が記されている。「演戯故事」では「飛登雲頭而無踪影」²²とあり、雲に飛び乗って姿形がなくなったとある。ここでは、「冊封琉球国記略」では天女が「雲」により隠れている内に昇天した様子である。一方で「演戯故事」では雲の上に乗って昇天していった内容となっており差異が見られる。組踊の演出では雲で隠す様な演出は見られない。そのため、雲で隠れるあるいは雲に乗って昇天する様子などは、「演戯故事」による文書上での組踊の内容から冊封使達に想像をかきたたせようとしたと考えられる。

最後に、「冊封琉球国記略」では「銘苺子亦追尋至樹下，与兒女对松樹大哭。」

とあり、銘苺子もまた子ども達を追い木の下まで尋ね、子ども達と泣いていたと記されている。「演戯故事」でも「弟姉默然流涙銘苺子亦流涙」²³とあり、子ども達と一緒に泣いていた。しかし、このくだりに関して「演戯故事」では銘苺子は天女が昇天をした後も子供たちは方々探し回り、帰りが遅くなっていた。銘苺子が子ども達を探していると子ども達が座っているのを見つけ、銘苺子は子ども達に母親は戻ってこないことなどを話す、三人がこの後を如何に暮らしていくか途方に暮れて泣いてしまう内容である²⁴。

そのため、「冊封琉球国記略」では銘苺子も儿女と共に天女の昇天に対して涙を流しているように見える。しかし、「演戯故事」では銘苺子は子ども達の心配と共に親子の行く末を憂えて泣く様子であり、沈復が組踊の内容に関して、「演戯故事」との間で解釈した内容に若干の相違がみられる。

そのため、「演戯故事」の内容に依拠しながらも梗概を示すため、沈復が「冊封琉球国記略」に記されたと推測される。

最後に、「冊封琉球国記略」では銘苺子父子たちは途方に暮れて泣いているところに上使が登場し、銘苺子父子のことを知り、国王から孝養することが以下の通り記されている。

忽出一大夫問銘苺子，回奏知国王，召其父子賜爵禄，并収其女入宮扶養。
【突然、一人の大夫が現れ銘苺子に尋ね、国王が(銘苺子親子の様子を)聞き、父子を呼び寄せて爵位を与え、また女兒を宮廷に入れ育てることにした。】

まず、「冊封琉球国記略」では「忽出一大夫問銘苺子」とある。「大夫」とは「官吏」のことをさす²⁵。そのため、組踊「銘苺子」ではおそらく「上使」のことであり、銘苺子に尋ねる内容である。「演戯故事」では「三人茫然以坐草野時有一位官員進來」²⁶とあり三人が草の上に座り茫然としているところに一人の官吏がやってきたとあるため、「冊封琉球国記略」の内容と類似している。また、「冊封琉球国記略」では「回奏知国王」とあり、国王が銘苺子の事情を聞いていることを述べている。一方で「演戯故事」でも「我王聞此事心甚憫之發諭旨」²⁷とあり、官吏は国王が銘苺子親子の事を聞いて憐れに思い、諭旨を發したと記されている。「冊封琉球国記略」では、諭旨を發したとは書かれて

いないが、国王が銘苺子親子の処遇として「召其父子賜爵禄，并収其女入宮扶養。」とあるため、論旨を発するという様な内容を略述したと考えられる。一方で「演戯故事」では、「女真鶴養之宮中又俟思龜成長而擧用之且薦汝貴位並賜汝銘苺田地號」²⁸とあり、銘苺子の娘真鶴は宮中へ入って養うことに、思龜は成長を待って官吏に登用することに、銘苺子は高い官位への推挙と田畑を与えることなどあり、類似しているが「冊封琉球国記略」より具体的に記されている。

一方で「演戯故事」では、上使が登場し、銘苺子を尋ね、銘苺子が天女と婚姻を結んだことから天女が昇天した後の哀れな様子に至るまでの経緯を述べている内容が詳述されている。

よって、「演戯故事」との内容を比較すると「冊封琉球国記略」では、「演戯故事」の内容を全て記している訳ではなく、要約した形で物語の展開を記していることがわかる。

(3) 「冊封琉球国記略」に詳述された内容 — 登場人物の装束や舞台装置の記述を中心に —

① 登場人物について

「冊封琉球国記略」において「演戯故事」より詳述された内容として、登場人物の装束の内容が詳細に記されている。銘苺子の装束の様子は以下の通り記されている。

先有一生，青衣皂帽扮一樵人，名曰銘苺子。

【まず、男役は青色の衣と帽子をかぶり、木こりに扮している。名を銘苺子という。】

前述した「冊封琉球国記略」では、まず「生」とある。「生」とは中国演劇の用語で男性役の人物を指している。その着ているものは青色の服と帽子をかぶって木こりに扮していると記されている。次に「青衣皂帽」とあり、銘苺子が水色の衣と帽子を被っていることがわかる。「同治六年卯九月 組躍 御近

習方」において、銘苺子の装束は「金入綿入道頭巾水色絵垣紗綾袷衣裳」²⁹とあり、「冊封琉球国記略」では「入道頭巾」を「皂帽」（帽子）とし、「水色絵垣紗綾袷衣裳」³⁰を「青衣」としているため、若干の差異はみられるが類似している。このため、「冊封琉球国記略」が1808年当時の装束となるため、1867年に記された「組踊集」に記された銘苺子の衣裳などから銘苺子の着ていた装束にはあまり変化がなかった可能性が高かったと推測される。

一方「演戯故事」では銘苺子の紹介を下記の通り記している³¹。

昔有銘苺子者原是家貧難堪常以耕耘為業

【昔、銘苺子という者がおり、この家は、農業を生業とし、貧しかった。】

「演戯故事」では、銘苺子の家は貧しく農業を生業としていた人物として紹介している。ここで、「冊封琉球国記略」の登場人物の生業が「樵人（木こり）」とあり、「演戯故事」との異同がみられる。

伊波普猷『校註琉球戯曲集』では、頭注で「銘苺子、農夫の名」³²とある。このため、琉球側では「銘苺子」を農夫という人物設定をしているが、沈復では、「樵人」となっており、なぜ沈復が銘苺子を木こりとみたのかは今後の課題としたい。おそらく、「冊封琉球国記略」では「青衣」を着る者は庶民の役柄として捉えたのであろう。

次に、「銘苺子」の天女の装束に関して「冊封琉球国記略」で以下の通り記されている。

継有一旦，甚美，頭梳高髻，後髮披肩，外披白綢五彩印花曳長袄，内衬銀紅衫子，肩上蟠大紅風帶一條，扮一天女

【つぎに、女性役はとても美しく頭の髻が高く、後ろの髪にある披肩の外は、白綢に様々な色がほどこされており長く引きずっている。中は、朱色の袖広の上着を羽織り、肩の上で赤色の帯（羽衣）がとぐろを巻くように風に舞っており、天女に扮している。】

「旦」は、中国演劇の用語における女性役を指している。次に「頭梳高髻」

とあり、女性の頭の髻が高いと記されている。この内容に関して、「組躍集」では「天女かもし」³³とある。このため、まず、天女の髪が高くみえたのはカムロと呼ばれる髪型によるものであると考えられる、また天女の髪は髻を加えて髪の高さを上げていたとも考えられる。したがって、「冊封琉球国記略」で髻が高いと記されていたのはおそらく、天女の髪が髻を入れて髪の高さを上げていたと観ていたと考えられる。

次に、天女の装束に関して「冊封琉球国記略」で羽衣は、白い絹に様々な色があり、引きずるほど長いものであったとしている。また、天女の衣裳が赤い色の上着に帯が肩の上で風に舞うようにとぐろを巻いている状態となっているとなっており、天女の装束が記されていることがわかる。一方で組踊台本では「飛衣」とのみ記されている。そのため、一概には言えないが、「冊封琉球国記略」には羽衣がどのような品物なのかを検討する上で必要であろう。

一方「演戯故事」では天女の紹介で「婦女把衣掛枝披髮臨泉獨躬容有國色衣非常衣」³⁴とあり、天女が着物を枝に引っ掛け、沐浴をし、容姿の端麗さと着物がこの世にあるような着物でない、ことが記されている。しかし、「冊封琉球国記略」に記されているような装束や結髪等の様子を記されていない。

最後に、子供たちの紹介に関してであるが「冊封琉球国記略」で以下の通り記されている。

生一女名真鶴、年九歳、又一男名思龜、年五歳、皆七八歳小童扮之、唇紅齒白、妝束逼肖。

【(銘苺子と天女の間には)一人の女兒が生まれ、名を真鶴といい、年は九歳。また一人の男児が生まれ、名を思龜といい、年は五歳。皆、七、八歳の子供が扮しており、唇が赤く歯が白くて美しく、現実にいるように見える。】

一方で、「演戯故事」でも「生一女一男女名叫真鶴年九歳男名叫思龜年五歳」³⁵とあり、子ども達の登場人物の名称と年齢も「名叫真鶴年九歳」「名叫思龜年五歳」ともに「冊封琉球国記略」と一致している。このため、「冊封琉球国記略」に記された登場人物名が「演戯故事」を援用していた可能性があることがわかる。また「冊封琉球国記略」では登場人物に扮した子供についても

記されており七、八歳の子が扮しているため、現実にいるように感じる、という演劇に関する私的な見解もわずかであるが垣間見える。

嘉慶 13 (1808) 年の冊封の際、管見の限りわずか 2 例のみしかみられないが、首里系の毛姓家譜の十三世安恭が 8 歳の頃に下庫理小赤頭となり、翌年に冠船芸能の踊童子として任命された。10 歳になり踊童子として任命され宴毎に踊りを行ったことなどから冊封使から様々な下賜品が送られている³⁶。次に、首里系の向姓家譜の十三世維屏が 11 歳の時に冠船芸能で躍童子として任命され冊封正副使らに下賜品をもらった内容が見られる³⁷。

『校註琉球戯曲集』では、1838 (道光 18) 年の冠船芸能の際に「銘苺子」で娘役を演じたとされる幸地は、「冠船躍方日記」に酉 (1837 年) 八月十六日条に、踊中として任命された際の役職は「下庫理小赤頭」である³⁸。

したがって、幸地の実年齢は不明ではある。しかし、前述した事例から 10 歳前後に下庫理小赤頭に任命されることなどから上演当時の年齢が 10 歳前後であると推測されるであろう。

そのため、「冊封琉球国記略」で子役は 7、8 歳の子どもが扮しており、現実の世界と近い、という記述から冠船芸能で若衆が組踊の子どもの役を演じていることがわかる。そのため、こうした記述から組踊が、実際の子役を使ってリアリティーを出していることを実際観劇して感じ、記したのではないだろうか。

② 舞台上に設置された「松」について

最後に、「冊封琉球国記略」で舞台装置としてある「松」について言及している内容が下記の通りである。

其場後之松樹專為此而設也。此樹甚高，已百年物矣。

【その場（舞台）の後ろには松がこの（「銘苺子」）のために設えている。この木は甚だ高く、すでに百年の物である】

この「冊封琉球国記略」の内容に関して、1838 (道光 18) 年の冠船芸能が行われた際に「冠船踊方日記」に銘苺子の松に関して戊 (1838 年) 七月条に、

舞台へ立てて据え置くため、真和志間切松川村から伐採し調達するように要請している内容がある³⁹。おそらくこの大松は「冠船躍方日記」にみられる「銘荊子松」である。また、八月十六日条には、銘荊子を演じるために必要な「銘荊子松」に添えるための「松のひけ」を十本大小に切ることを踊方筆者から真和志間切の下知役らへ連絡する内容がみられる⁴⁰。

したがって、「冊封琉球国記略」に記されているような「百年物」であるかは不明であるが、実際の冠船芸能で銘荊子を演じる際には実際の大木の松の伐採や枝の付け替えを行っていたことがみられ、「冊封琉球国記略」は実際に観劇をしないことでしか伝わらない内容である。

おわりに

以上、「冊封琉球国記略」の内容に関して記された組踊「銘荊子」の内容を「演戯故事」の内容などを中心に雑駁であるが若干の検討を試みた。実際には、「冊封琉球国記略」に記された内容に関しては概略的に漢文で記されており、物語のあらすじをある程度把握した上で「演戯故事」に依拠した形で書かれた可能性があろう。

一方で、「冊封琉球国記略」には「演戯故事」には記されていない登場人物の扮装や容貌をみること等ができる。それにより、当時の装束を『校註琉球戯曲集』や「組躍集」などの組踊台本等と検討していくことで冠船芸能当時の様子をうかがい知ることの出来るものとなっている。こうした内容は単に「演戯故事」に記されていないため、観劇した記憶などを頼りに記していた可能性が高いということであろう。また、登場人物の扮装や演じている人物の年齢などが記されている場合もあることなどから演劇として「銘荊子」を観ていたことが分かる。

最後に「冊封琉球国記略」には「銘荊子」に関して「此其開国時之故事」とあることなどから組踊は「故事」を基に作られた演劇ということを理解している。そのため、中国側の観劇した人達が王府側の作成した「演戯故事」の漢訳から組踊の主題意図を理解し、自ら観劇した記憶などと照らし合わせながら書いていた可能性があったと考えられる。

そのため、中国側から冠船芸能の内容が記されている側面からみていくと、

近世琉球の冠船芸能を検討する上での重要な史料であると考えられる。

注

- 1 矢野輝雄『組踊への招待』琉球新報社、2001、40—41頁。
 - 2 板谷徹『近世琉球の王府芸能と唐・大和』岩田書院、2015、212頁。
 - 3 拙稿「尚家文書『兄弟報仇忠孝並全』（演戯故事）について—組踊台本・冊封使録との比較を中心に—」（『琉球アジア社会文化研究』第14号、2011、10。）
拙稿「冊封使に供された組踊『雪払い』の一考察—演戯故事・組踊台本との比較を通して—」琉球大学国際沖縄研究所編『越境する東アジア島嶼世界—第15回琉中歴史関係国際学術研究会—』琉球大学国際沖縄研究所、2015.2。
拙稿「冊封使に供された組踊『孝行の巻』に関する一考察—演戯故事に記された組踊の内容と周辺史料の比較を通して—」（『国際琉球沖縄論集』6号、2017.3。）
 - 4 蔡根祥「前言」（沈復著 彭令整理『新增補 浮生六記』人民文学出版社、2010。）
 - 5 前掲注4同
 - 6 楊仲揆『琉球古今談』台湾商務印書館、1990。 吳幅員「『浮生六記』『中山記歴』篇為後人偽作説」（『東方雜誌』第11卷第8期、1996.3。）
 - 7 沈復著 彭令整理『新增補 浮生六記』人民文学出版社、2010、93頁。
 - 8 前掲注7・「演戯故事」（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書127号）
 - 9 「丙寅冠船仲秋宴前日公事日記 卷之六十九」には以下の通り記されている。
 - 一 中秋宴之時、勅使様御拜見之躰被仰付候間、兼而躰組八冊墨當江書調させ三日前長史国場親雲上色衣冠者天使館参上、阿（河）口通事御取次、兩勅使様被為御覧壹冊ツ、長史名（各カ）書之手本壹通ツ、取添差上、且同日仮長史宮城親雲上、遊撃・都司・彈壓官御届参上、各相公取次、躰組壹冊ツ、長史名（各カ）書之帖壹通ツ、取添差上候事、
附、本文躰組外壹冊者表御方御用
壹冊者阿（河）口通事見合用壹冊者
此元見合用書調させ候也
- （『丙寅冠船仲秋宴前日公事日記 卷之六十九』（1866、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書224号）
- 10 前掲注7同
 - 11 「風帯」諸橋轍次『大漢和辞典』卷12、大修館書店、1959、336頁。
 - 12 「演戯故事」（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書127号）
 - 13 「演戯故事」では、以下の通り記されている。

婦女日子何取我衣去
銘苺子曰此松乃我松此井亦我井也何為掛衣
婦女日子何不知理夫松與水乃陰陽造化所生而非我私有子以為已物豈不誤乎
銘苺子曰萬物為生皆受陰陽之化而生人亦得其氣而生有男有女因立夫婦之道以居世間汝是我女乃男願為夫婦結偕老同穴之好何如
婦女日子乃世間之人也妾非塵世之人乃天女也且不知夫婦情愛之道請還我衣妾非此衣不能飛去
銘苺子曰天雨降于世界即為世界之水汝雖天女今日降于塵世則塵世之人也

婦女曰子之所言只塵世情俗之事也天與塵世大不相同夫天之所定不得自專

銘荊子曰世界所為皆隨天所為法之效之而行之也非私竊所為焉請深思之天女被取其衣無力可致【女性は、「あなたはなぜ私の着物を取り去ろうとするのですか。」と言った。銘荊子は、「この松はまさに私の松であり、この井戸も、私の井戸である。どうして、着物を（松の枝に）掛けたのか。」と言った。女性は、「あなたはその松と（井戸の）水に何があるのかを知らないのか。まさに陰陽が造りだされている所であり、（私有するような）ものではない。あなたのもとするのは、誤りではないか。」と言った。銘荊子は、「天地の万物は、陰陽のみちびきを得て生まれていて、生きている人をまた得られる。その気は男と女というのを生んだ。よって、夫婦の道理が確立してこの世がある。お前は女性で、私は男性である。夫婦になることを願い、共に年をとっても、夫婦が同じ墓に葬られるまで仲のむつまじくしたいのだがどう思うか。」と言った。女性は、「あなたはこの世の人であって、わたくしめはこの世の人ではありません。天女であります。その上、夫婦が互いに愛し合う道理というのをわかりません。私の着物を返してください。わたくしはこの着物がなく（天へ）飛んでゆくことができないのです。」と言った。銘荊子は、「雨は世の中に降り、ただちに世の中の水となる。おまえは天女だけれども、今はこの世に降りてきているので、この世の人である。」と言った。女性は、「あなたの言うことは、世俗の事である。天とこの世は一緒になれないのです。それは天が定めたことなので、自分ひとりでも物事をきめることができない。」と言った。銘荊子は、「世の中の皆は天を手本として行っているのであって、ひそかに盗んだのではなく、（私の）深い思いを天女につげるためにその着ている着物を取って、（飛ぶ）力を無くしたのです。」と言った。天女は羽衣を取られて、（昇天する）力が無くなった。】

前掲注 12 同

14 前掲注 12 同

15 「演戯故事」では、以下の通り記されている。

若兒女自左自右抱着不放則不能乘刻限而飛升去不如誑他早睡俟他睡熟暗地飛去
因召兒女曰明日我携汝等或原野或水濱終日遨遊而回汝等宜今夜早睡而明日早起
兒女共曰奈今夜難離母側只宜傍母親而睡
母撫其背摩其体曰早睡早睡兒女共睡着了

【もし子どもたちが左から右から抱いて引っ付き（私を）逃がさなかったら、きめた時刻に飛んで昇天することができない。そうでなければ、（子供たちを）騙すのが良いので、彼らが早くに寝るのを待って、熟睡したら、暗い場所から飛び去ろうとした。したがって、（天女は）子どもたちを呼び寄せて、「明日私はあなたたちをひきつれて、野原や川や海のほとりで一日遊びましょう。あなたたちは今日の夜は早く寝て、明日早く起きなさい。」と言った。子どもたち二人は、「いかんせん今夜は母の側から離れ難いので、ただ母親がそばで眠りたいのです。」と言った。母は（子供たちの）背中を撫でて、体をさすり、「早くねむれ、早くねむれ。」と言い、子どもたちは眠りについた。】

前掲注 12 同

16 「榻」大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』下、角川書店、1994、2973 頁。

17 前掲注 12 同

18 前掲注 12 同

19 前掲注 12 同

20 前掲注 12 同

21 「演戯故事」では、天女が児女に言付ける内容を以下の通り記している。

天女亦流涙曰我非塵世之人汝等勿以我為念宜事父親以全其身

【天女はまた涙を流し、「私はこの世の人ではありません。あなたたちは私を思ってはなりません。父親に（あなたたちが私を思うように）尽くしなさい。」と言った。】

前掲注 12 同

22 前掲注 12 同

23 前掲注 12 同

24 「演戯故事」では、銘苺子と児女（真鶴と思亀）のやりとりについて以下の通り記されている。

銘苺子拭淚悲嘆曰我兒女今及天暮未回宜尋他携回

言畢直到井邊不見

兒女轉到松樹之下只見弟姉坐在其處

弟思龜向父流涙曰尋母不在我與姉如之何

父謂兒女曰我有一言汝靜聽焉

汝母非塵世之人乃天上之女也

既回天去決不再回□勿慕不回之母親

若慕不回之母親却非為母

亦非為我只宜以予一人為親各能成長而立此世

此則度世之務孝順之道也

弟姉默然流涙銘苺子亦流涙

【銘苺子は涙を拭いて嘆き悲しみ、「私の子どもたちは日が暮れてもまだ戻っていない。彼らを探して連れ帰らなければ。」と言った。言い終えて、井戸のまわりについたが（子供たちは）見あたらなかった。松の木の下に行くと、弟と姉はその場所に座っていた。弟思亀は父に向かって涙を流して「母を尋ねたけれどいなくて、僕と姉はどうしたらいいのだろうか。」と言った。父は子供たちに、「私から話があるので、お前たち静かに聴きなさい。」と言った。お前たちの母はこの世の人ではなく、まさに天の世界の女性である。もはや天に昇ってしまい、もう二度と戻ってこない。思い焦がれることをするな。思い焦がれても母親は戻らないし、かえって母のためにならない。また私のためにもならない。ただ私は一人が親のためにそれぞれよく成長することができて、この世で出世してほしい。これはまさに世をわたる者の務めであって、孝順の道でもあるといった。弟と姉は黙ったまま涙を流し、銘苺子もまた涙を流した。】

前掲注 12 同

25 「大夫」大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』上、角川書店、1994、578頁。

26 前掲注 12 同

27 前掲注 12 同

28 前掲注 12 同

29 「同治六年卯九月 組躍 御近習方」（1867、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書 31号）

30 前掲注 29 同

31 前掲注 12 同

32 伊波普猷『校註琉球戯曲集』復刻版、榕樹社、1992（初版 1929年）、209頁。

33 前掲注 29 同

- 34 前掲注 12 同
 35 前掲注 12 同
 36 「毛姓家譜(支流)(美里家 六世 毛見龍 嵩原親方安依)」で下記の通り記されている。(括弧は筆者により加筆した。)

同(嘉慶)十三年戊辰正月二十七日因 冊封天使臨國為作躍事恭蒙 聖上賞賜羅緞緞帶一條五月十七日 天使已臨于國每宴駕到王府時作躍款待蒙兩位 天使賞賜筆二本墨二匣詩箋一匣手帕一條竹心香一袋手香一匣帶子一條扇子一把虎節竹箸一双
 (那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇第1巻7家譜資料三、那覇市企画部市史編集室、1982、827頁。)

- 37 「向姓家譜(眞壁家 四世 向鶴翔 奥間親方朝光)」で下記の通り記されている。
 嘉慶十三年戊辰從 冊封兩勅使恩賜香珠一墨一挺筆二本糸手拭一筋 每宴作躍以備戲席故也
 (那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』第1巻7家譜資料三、那覇市企画部市史編集室、1982、286頁。)

- 38 「冠船躍方日記」酉(1837年)八月十六日条に下記の通り記されている。

御印覚印

御書院御小姓	同
今婦仁里之子	宇地原里之子
同	同小赤頭
濱元里之子	豊見城真莉金
下庫理小赤頭	同
勝連真市	嘉味田松金
同	同
安里小樽金	大村真三良
同	同
兼濱真蒲戸	小那覇真山戸
同	

幸 地

右躍中御雇被仰付可被下候以上

酉

八月十六日 奉行四人

(「冠船躍方日記」1838、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書 81号)

- 39 「冠船躍方日記」戌(1838年)七月条に下記の通り記されている。

御印覚印中取

大松崧本

右躍方舞臺江立合用候間真和志間切

松川村帳内前之原山野より伐取相用得

候様同間切江被仰付可被下候以上

戌

七月 筆者忒人

(「冠船躍方日記」1838、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書 82号)

40 「冠船躍方日記」戊（1838年）八月十六日条に下記の通り記されている。

寛
松之ひけ拾本大小
右御城舞豪江立合候銘苺子松二
付合用明日伐取方二其間切江西平
筑登之親雲上差越候間惣山嘗きやな崎紅江
罷出拍居候様可被申渡候此段致問合候
以上
戊
八月十六日 筆者式人
真和志間切
下知役 検者 さはくり中

（「冠船躍方日記」1838、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書 82 号）

参考文献

- ・板谷徹『近世琉球の王府芸能と唐・大和』岩田書院、2015。
- ・伊波普猷『校註琉球戯曲集』復刻版、榕樹社、1992。（初版 1929）
- ・「演戯故事」（那覇市歴史博物館蔵、尚家文書 127 号。）
- ・我部大和「尚家文書『兄弟報仇忠孝並全』（演戯故事）について—組踊台本・冊封使録との比較を中心に—」（『琉球アジア社会文化研究』第 14 号、2011. 10。）
- ・我部大和「冊封使に供された組踊『雪払い』の一考察—演戯故事・組踊台本との比較を通して—」琉球大学国際沖縄研究所編『越境する東アジア島嶼世界—第 15 回琉中歴史関係国際学術研讨会—』琉球大学国際沖縄研究所、2015.2。
- ・我部大和「冊封使に供された組踊『孝行の巻』に関する一考察—演戯故事に記された組踊の内容と周辺史料の比較を通して—」（『国際琉球沖縄論集』6 号、2017.3。）
- ・「冠船躍方日記」1838、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書 81 号。
- ・「冠船躍方日記」1838、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書 82 号。
- ・呉幅員「『浮生六記』『中山記歴』篇為後人偽作説」（『東方雑誌』第 11 卷第 8 期、1996.3。）
- ・沈復著 彭令整理『新增補 浮生六記』人民文学出版社、2010。
- ・大東文化大学中国語大辞典編纂室編『中国語大辞典』上／下、角川書店、1994。
- ・「同治六年卯九月 組躍 御近習方」（1867、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書 31 号。）
- ・「丙寅冠船仲秋宴前日公事日記 卷之六十九」（1866、那覇市歴史博物館蔵、尚家文書 224 号。）
- ・那覇市企画部市史編集室編『那覇市史』資料篇第 1 卷 7、家譜資料三、那覇市企画部市史編集室、1982。
- ・諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店、1959。
- ・矢野輝雄『組踊への招待』琉球新報社、2001。
- ・楊仲揆『琉球古今談』台湾商務印書館、1990。

